

プレゼンテーションの「内容を検討する能力」に対する 強制連結法を用いた効果の検討

Study on the Effect of Utilizing Compulsory Linkage on the “Ability to Analysis Contents” of Presentation

戸田 百合子^{*1}, 近藤 啓史^{*1}, 梅田 恭子^{*1}
Yuriko Toda^{*1}, Hiroshi Kondo^{*1}, Kyoko Umeda^{*1}

^{*1} 愛知教育大学

^{*1} Aichi University of Education

^{*1} Email: s2130068@aeu.ac.jp

あらまし：本研究では、プレゼンテーションの授業に強制連結法を用いることで、プレゼンテーションの「内容を検討する能力」への効果を検討することを目的とする。「内容を検討する能力」の中では、特に「目的の明確化」と「論理的構成」が重要であると考えられ、プレゼンテーション作成・発表後にこの2つに関する評価を行った。分析の結果、強制連結法を用いることで、論理的表現がプレゼンテーションスライドに表れ、聴き手にプレゼンテーションの目的が伝わるようになった。

キーワード：プレゼンテーション、強制連結法、内容検討能力、目的の明確化、論理的構成

1. はじめに

1.1. 背景

山下ら⁽¹⁾は書籍調査により、プレゼンテーション能力を8つに分類しているが、その中でプレゼンテーションに特に影響を与える能力として「内容を検討する能力」を挙げている。そして、「内容を検討する能力」の中でも言及数の多い「目的の明確化」と「論理的構成」が重要であると考えられる。

一方、林ら⁽²⁾は、プレゼンテーションの設計に強制連結法を取り入れた。強制連結法とは、発端部と帰結部の2つのスキーマ(キーワード)を設定し、間にいくつかのスキーマを挿入することによって2つのスキーマを強制的に連結させる手法である。そして、林ら⁽²⁾の研究により、強制連結法を用いることは「目的の明確化」と「論理的構成」を促し、「内容を検討する能力」の向上に有効な手法であると考えられる。

しかし、林ら⁽²⁾の研究ではプレゼンテーションの設計のみにとどまっており、実際に視覚資料を作成し、聴き手を前にしてプレゼンテーションを行うという活動はされていない。そのため、論理的構成が視覚資料にも反映されているか、聴き手に目的が伝わっているか、等の評価が行われておらず、強制連結法を用いた授業が「内容を検討する能力」に有効な手法であると結論付けるには不十分であると考えられる。

1.2. 目的

そこで、本研究では林ら⁽²⁾の研究実践に加えプレゼンテーションの作成・発表を行い、さらに

① 視覚資料(プレゼンテーションスライド)に論理的表現が表れているか。

② プレゼンテーションの目的が聴き手に伝わるか。という観点から評価を加えることで、プレゼンテーションの「内容を検討する能力」に対し、強制連結法を取り入れた授業の効果を検証する。

2. 研究の方法

2.1. 授業実践

研究対象は大学のプレゼンテーションに関する授業の受講生とし、強制連結法を使用する実験群23名、使用しない統制群41名で行った。実験群・統制群共に2か月間の間に2つのテーマでプレゼンテーションを作成した。授業の流れは、講義→スライド作成→発表→相互評価→フィードバックとスライドの修正をテーマ毎に繰り返した。尚、実験群ではスライドを作成する前に強制連結シートを用いて活動を行った。この活動の流れは林ら⁽²⁾の研究と同様、「強制連結シート作成のポイント」を説明し、強制連結シート作成、その後は、学生間で強制連結シートの相互評価を行った。

本研究では、上記の活動に加え、スライド修正の前に筆者らの採点による強制連結シートのフィードバックを加えた。さらに視覚資料であるプレゼンテーションスライドを作成する際に、「強制連結シートとスライドの対応方法」について説明した。

2.2. 評価方法

評価は2つの観点で行った。

① 視覚資料(プレゼンテーションスライド)に論理的表現が表れているか。

中野ら⁽³⁾の論理的表現の8つのカテゴリー(順序を示す、対比する、話を移す、等)を用いて評価し

た。ただし中野ら⁽³⁾分類は口頭発表用であるのに対し、本研究では視覚資料に表れる論理的表現を評価するため、中野⁽⁴⁾が示した口頭発表での論理的表現例をスライド中の表現に対応させ採点を行った。

② プレゼンテーションの目的が聴き手に伝わるか。

まず、文献調査を行い、プレゼンテーションの目的を「情報提供」から「行動を実行する」までの4段階に分類した。この段階に合わせてルーブリックを作成し、聴き手による評価を行った。

また、事前に群間の差を測るために、平山ら⁽⁴⁾の批判的思考尺度を用いた事前アンケートを行った。

3. 結果

3.1. 事前アンケート

1 要因参加者間で分散分析を行った結果、批判的思考尺度は実験群の方が統制群より5%水準で有意に高かった($F(1,51)=4.99$ $p<.05$)。したがって、事前に群間に能力の差があったことが考えられる。そのため、以降の分析は統制群の批判的思考得点上位23名(実験群と同じ人数)を抽出して行った。抽出した上位群と実験群の間に有意差はみられなかった。

3.2. 論理的表現がスライドに表れているか

論理的表現の8つのカテゴリーごとに1要因参加者間で分散分析を行った結果、差が認められた3カテゴリーを表1に示す。

表1 論理的表現のスライド出現数の比較結果

| カテゴリー | 結果 | F 値 |
|-------|---------|-------------------------|
| 根拠を示す | 実験群>統制群 | $F(1,38)=10.15$ $p<.01$ |
| 例を示す | 実験群>統制群 | $F(1,38)=11.51$ $p<.01$ |
| 順序を示す | 実験群<統制群 | $F(1,38)=10.91$ $p<.01$ |

これらの結果から、「根拠を示す」「例を示す」のカテゴリーでは実験群の方でより論理的表現が表れており、「順序を示す」のカテゴリーにおいては統制群でより論理的表現が表れていることがわかる。

3.3. 聴き手に目的が伝わっているか

ルーブリック評価の得点を1要因参加者間で分散分析を行った結果、5%水準で実験群の方が統制群より有意に得点が高かった($F(1,42)=6.23$ $p<.05$)。したがって実験群の方が統制群よりプレゼンテーションの目的が聴き手に目的が伝わっていたことが分かる。

4. 考察

① 視覚資料(プレゼンテーションスライド)に論理的表現が表れているか。

・「根拠を示す」「例を示す」：実験群>統制群

強制連結法作成のポイントとして、強制連結シートに入れるとよいスキーマに「根拠」と「具体例」

があり、学習者があらかじめ根拠と例を考慮することができたからであると考えられる。

・「順序を示す」：実験群<統制群

プレゼンテーションの作成方法に理由があると考えられる。統制群ではプレゼンテーションのスタートからゴールにたどり着くまでに、いくつか情報を羅列してから、順番に説明していくという表現方法が多く見られた。一方実験群では、強制連結法によってスタートとゴールを一直線に結んでからプレゼンテーションを作成する。よって内容が枝分かれしている統制群の方が、実験群より順序を示す必要性が高く、「順序を示す」のカテゴリーが多くなったと考えられる。

② プレゼンテーションの目的が聴き手に伝わるか。

分析の結果、プレゼンテーションの指導に強制連結法を取り入れた群の方が、目的が聴き手に伝わったことが分かった。これは、強制連結法の「帰結部を意識できる」という特徴が生かされ、帰結部に設定したプレゼンテーションの目的を、学習者が十分に意識してスライドを作成、発表できたためと考えられる。

5. 結論

検証の結果、プレゼンテーションの設計の際に強制連結法を取り入れ、視覚資料を作成・発表を行うと、今回の視覚資料であるプレゼンテーションスライドに根拠を示したり例を示したりする表現が強制連結法を使わない群より多く表れることが分かった。つまり「論理的構成」に有効であること可能性が示唆された。また、プレゼンテーションの目的が聴き手に伝わったことが分かり、「目的の明確化」に有効であることが分かった。以上から、プレゼンテーションの「内容を検討する能力」に対する強制連結法を用いた効果が示された。

参考文献

- (1) 山下祐一郎・中島平(2010)「プレゼンテーション能力の評価方法確立のための書籍調査とその評価方法を用いた情報システムの開発」情報学研究 第9号63-70
- (2) 林徳治・橋本恵子(2004)「強制連結法を活用した大学の授業設計」教育情報研究 第19巻 第3号
- (3) 中野美香(2012)「大学生からのプレゼンテーション入門」ナカニシヤ出版
- (4) 平山るみ・楠見孝(2004)「批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響—証拠評価と結論生成課題を用いての検討—」教育心理学研究 2004、52、186-198